

ITコストの予算・実績管理に活用 業務が効率化され、コスト適正化の意識改革も促進

Workday Adaptive Planning の導入により、ITコストの予算・実績管理の業務が効率化され、過剰なコストを把握しやすくなり、コスト最適化につながっています。

課題

クレジットカード事業を主体に成長してきた株式会社クレディセゾン。近年は、ファイナンス事業、リース事業、法人向けクレジットカード事業などにも力を入れています。

同社では、会計勘定、財務会計、管理会計を同一のシステムで運用していますが、そのシステムは勘定系が強い一方、管理会計が弱く、情報を集約するための業務が煩雑化していました。特に課題に感じていたのが、EDP (Electronic Data Processing) 費用の予算・実績管理です。EDPは、複数のベンダー製品が使われており、複数の部署が活用しているため、それぞれの部署で予算・実績管理を行い、Excelに入力し、システム企画部にてそれを集約して集計していました。財務会計上、EDPのコストは最も大きく、この数値に齟齬があると経営にも大きなインパクトがあります。しかし、複数人が作業するためExcelの計算式の指定先がずれるミスや、入力の誤りなどが発生しやすく、数値が合わないときの原因究明にも時間がかかっていました。

また、コストの経年変化などを簡単に確認することもできず、コスト効率の評価なども手間がかかるという課題がありました。

“

システム企画部のミッションの一つは、ITシステムコストの最適化です。システム部門、開発部門、基盤統括部門、ネット事業部門などと調整して、ITコストの可視化、適正化を行っており、特にEDPのコスト管理が急務でした。

大石 泰章 氏
システム企画部 課長

Workdayを導入した理由

管理会計に課題を感じており、予算管理ができるシステムを検討することになり、複数のベンダーから提案を受けました。同社では、利用している明細フォーマットが2,000種類あり、それぞれの分析の軸も異なるため、これに対応できることがシステム要件でした。検討した製品の多くはフォーマットが定型化されており、自在に変更できませんでしたが、Workday Adaptive Planning の場合は、Excelに近い操作ができ、設定の自由度が高い点を魅力に感じました。デモで、同社のサンプル明細を使って、実際に動かすところを見て、項目や属性の追加などが簡単にできることを確信しました。

もう一つの選定理由は、プログラミング、データベースなどの知識が不要で使えることです。システム企画部ではプログラミングスキルのある人材が少ないため、ノーコードで利用できることは、Workdayの大きなアドバンテージでした。

導入にかかったのはおよそ3ヶ月ですが、その間に運用方式などを導入パートナーとともに考え、2020年5月より運用を開始しました。



Overview

- 業務内容: ペイメント・リース・ファイナンス・不動産関連・エンタテインメントほか
- 本社所在地: 東京都豊島区東池袋3-1-1 サンシャイン60・52F
- 従業員数: 4,415名 (2020年9月30日現在)

利点

最も大きなITコストであるEDP費用の現状を可視化し、過剰になっている部分を見つけ出し、最適化を行うことが急務でした。Workday Adaptive Planningの導入前は、Excelで管理していましたが、データのやり取りが煩雑でミスも多くデータの精度が低いという課題がありました。Workday Adaptive Planning には次のような利点がありました。

- データを関係部門で共有し、データ入力・集計に関わる業務を効率化できる
- データの管理、集計にプログラミングスキルが不要で、カスタマイズできる
- 予算・実績データをレポート化し、経年のコスト変化、他と比較した場合のコスト効率などがすぐに確認できる

Workday Applications

- Workday Adaptive Planning

詳細 / 結果

データを元にコストを最適化することの意識が各部門で根付きました。コストの可視化により、ベンダーとの交渉がしやすくなり、コスト最適化につながっています。入力業務も効率化されデータの精度が向上しました。

- 各部門でコスト管理を定着させ、数字で判断できるように
- 契約ベンダーは250社。それぞれのコストも把握しやすく
- 業務効率化、データの精度向上にも

各部門でのコスト管理を定着させ、数字で判断できるように

各部門のコストの適正化を進めるのは、システム企画部ではなく、各部門の現場担当者です。それを意識してもらうために、部門の責任者のもとでコスト管理をするという体制にしました。自分の部門でのコストが現状いくらなのかを数値で把握できるようにしたことで、過剰コストになっている部分が判断しやすくなり、どこから見直していくべきか優先順位をつけやすくなりました。

同時に、コスト削減の成果もわかりやすくなりました。例えば、AWS (Amazon Web Services) を導入することで、以前よりもコストが下がっていることが可視化できれば、それに応じた予算管理ができるようになり、コスト効率の良し悪しも判断できます。

契約ベンダーは250社、それぞれのコストも把握しやすく

EDPの実現のために、250社以上のベンダーと契約していますが、Workday Adaptive Planning によって、ベンダーごとのシステムコストが管理しやすくなりました。ベンダーが異なると、比較や費用対効果の検証がしにくい傾向がありますが、レポート化することでコスト効率が悪い部分を判断できるようになりました。例えば、契約期間が長いのに価格が適正でない、類似サービスと比べて割高などの問題点が明らかになり、数値に基づいてベンダーとの交渉ができるようになりました。

業務効率化、データの精度向上にも

現場の声として最も評価が高いのがデータの管理のしやすさと、それに伴うデータ精度の向上です。導入以前は、Excelを配布して、各部門で入力した数値をシステム企画部で集約して集計していましたがケアレスミスで数値にずれが生じることがありました。報告書と実際の数値の差にも気づきにくく、1ヶ月後にミスが発覚してそこから原因を追求して修正するなど、データの精度も高くありませんでした。Workday Adaptive Planning により、共通のファイルをクラウド経由で編集できるようになり、業務が効率化し、データに誤りがあるとすぐにわかるようになりました。

なお、ミスを減らすために運用ルールも定めて、許可なく行の追加などを行わないようにして、シートが複雑化するのを防いでいます。現在は、予算、実績をそれぞれシートで入力して、レポートで推移や比較ができるようにしています。

“

システムの要件としてノーコードは必須でした。Workday Adaptive Planningはあくまで手段ですが、現場の人たちが入力したデータが源泉となり、次のプランニングに活かせており、コスト最適化につながっています。

“

現状では、EDP管理のために使っていますが、他の管理系部門での活用もできると思います。全社的に管理できるようになれば、レポートや分析もさらに充実するので、今後活用の場を拡大していきたいです。

大石 泰章 氏
システム企画部 課長

“

Workday Adaptive Planning により、データ入力、集計の業務が効率化し、データの精度が上がりました。担当者全員が共通のファイルにデータを入力するので、他の部門の状況も把握でき、コスト最適化の意識にも影響しています。

吉原 卓磨 氏
システム企画部